

選評

福田恭子

ニコラ・プッサン作《足を洗う女のいる風景》とミシェル・パサール
—古代ローマ、ウェラブルムの風景—

本論文は、画中に描かれたモチーフから従来《足を洗う女のいる風景》と通称されてきたプッサンの後期風景画を対象とし、その主題に新たな解釈を提示するものである。精緻な作品観察と古典的テキスト・同時代資料の適切な組み合わせにより、魅力的な仮説を論理的かつ説得力をもって実証した、きわめて完成度の高い論文である。

福田氏はまず、本作品に描かれた物語を、オウィディウスの『変身物語』に基づく「ウェルトゥムヌスとポモナ」にまつわる場面と同定するサザランド・ハリスの説に同意するも、ハリスの解釈からは説明のつかない要素が複数見出されることを指摘する。

ついで、この場面が描き込まれた風景を詳細に観察し、舞台となる湿地や河川、遠景の建築物等の分析から、それが古代ローマの地誌と重なりあうものであることを指摘し、その典拠として、オウィディウスの『祭暦』第六巻に記されるウェラブルムの湿地帯の描写を提案する。そして、それを古代ローマにおけるウェルトゥムヌス信仰と関連付けることで、描かれた主題と背景モチーフの密接な関連性を主張している。この解釈により、通例通りの果樹園ではないという場面設定や二人の登場人物の向き、身振り、両者が裸足である点など、本作品に描かれたほぼすべての要素を説明することに見事に成功している。

福田氏はさらに、本作品の背景において、前景にローマ建国以前の牧歌的世界、後景に文明化した人間の世界という、異なった時代の対比が行われていると考えられることまで詳らかにするが、これはプッサンによる他の後期風景画にも見られる仕掛けであり、首肯できるものである。

そして以上のような、本作品に込められた重層的な古典主義的教養が、きわめて博学であった注文主ミシェル・パサールにまことにふさわしいものであったと結論づけるのである。

本論文は、本作品の主題を明らかにしたのみならず、プッサン後期の一連の風景画の解釈にとっても有益であり、プッサン研究に大きく寄与する可能性を有するものである。今後は福田氏によって、この大画家の後期風景主題作品が総体として解明されていくことが強く期待される。

以上により、福田恭子氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称えたい。